

左岸から順に木曾川、長良川、揖斐川と並ぶ木曾三川。これらの川が互いに交わることなく、河口まで流れゆくこの風景を江戸時代の人びとが見たら、このように思うだろう。

濃尾平野の肥沃な大地は、木曾三川の賜物だ。反面、堆積した土砂が広がる低湿地では、明治時代まで川が網の目のように流れ、合流地点はたびたび氾濫^{はんらん}。川に挟まれた地域に住む人々は自衛策として、集落の周りに城壁のように堤防を築き、輪中を形成した。

木曾三川の分流は、江戸時代の「宝暦治水」（1754～1755年施工）などの治水工事を経て、オランダ人技師デ・レーケが計画した「三川分流工事」（1887～1912年施工）によって完成した。以降、水害は激減する。

三川分流工事では、堤防による河川の締め切りのほかに、新たに河道を開削した。現代から考えれば、大規模な自然環境の破壊だったかもしれない。しかし、100年経った今では、新たな動植物が息づいている。これも土木のひとつの功績だ。

おおむら・たくや

1982年生まれ。写真家。大学で土木を専攻。卒業後、写真撮影に針路をとる。大学4年間で苦学して修めた構造力学の知識を生かして、雑誌取材を中心に土木の施工を撮影している。

[撮影地] 三重県桑名市 多度山中腹

© OMURA Takuya